

会 議 録

会 議 名	平成 28 年度東浦町パートナーシップ推進事業補助金審査会	
開 催 日 時	平成 28 年 7 月 9 日（土） 午後 2 時から午後 3 時 30 分まで	
開 催 場 所	勤労福祉会館 会議室D	
出 席 者	委員	吉村輝彦委員、牧野清光委員、久米弘委員、戸張里美委員、早川信之委員
	事務局	原田英治課長、磯村課長補佐、柿野主事
	申込団体	東浦アートプロジェクト、特定非営利活動法人新青樹
議 題	1 平成 28 年度東浦町パートナーシップ推進事業（公開プレゼンテーション審査） 2 審査結果 3 講評、総括	
非公開の理由		
傍聴者の数	7 名	
審 議 内 容 （ 概 要 ）	<p>議題</p> <p>1 平成 28 年度東浦町パートナーシップ推進事業（公開プレゼンテーション審査）</p> <p>平成 28 年度東浦町パートナーシップ推進事業申込団体からプレゼンテーションにて事業の説明を行った後、委員から質疑、これに対する応答が団体よりあった。</p> <p>なお、各団体の質疑応答は下記のとおりである。</p> <p>（1）東浦アートプロジェクト</p> <p>（委員）ワークショップ 8 回のテーマはすでに決まっているのか。</p> <p>（団体）書類の計画書にある実施する項目をテーマとしてすすめる。</p> <p>（委員）中心となるメンバーは 10 名程度といったが、ワークショップの参加者はもっと多くの方が参加できるのか。</p> <p>（団体）ワークショップの参加者目標自体は、20 名程度だが、多かつたら多い方がよい。中心となる人物が 10 名程度に絞られるのではないかとの予想を立てている。</p> <p>（委員）参加者を集めるためのツールは何か。</p> <p>（団体）チラシをうち、盆踊り等で配布する。大学にも配布予定で</p>	

ある。また広報に掲載し、SNS で拡散する予定である。

(委員) 平日夜間のワークショップでは、参加者層がかなりかぎられてくることが想定される。

地域の人たちがどれだけ参加できるのかを考えた上で日程等を決定すると思うが。

(団体) この講師でなければならない理由がある。ワークショップは、“話し合いの場” になってしまい、楽しい気持ちやワクワクする気持ちが置き去りにされてしまう傾向にある。この講師の場合は、ファシリテーターとしても優秀であり、かつコーチングの技術を持っている。

平日夜間ということで、働く世代が対象になってくるが、基本的には世代を問わず参加してほしいと思っている。

(団体) 補足として、ワークショップ自体は講師にあわせたスケジュールを考えているが、そもそもは横のつながりをつくっていくことが目的であるため、土日の昼間に集まるということも想定している。ワークショップ以外のところで、お茶をしながら、講師の前では話せないことについても、ざっくりと話せるような交流の場は設けていきたいと考えている。

(委員) 紹介する団体として、なぜ琥珀プロジェクトを選んだのか。

(団体) 行政の力を借りず、市民の力でやり遂げた実績がある。ボランティアでつくり上げられた映画であるため、東浦町としてはそちらの方の映画を目指していきたいのではないかと考えた。

(2) 特定非営利活動法人新青樹

(委員) 今年も継続して行うとのことだが、続けることによって、出てきた問題があると思う。何かあるか。

(団体) (於大プレーパークの開催によりプレーリーダーとしての活動が) はじまってから、まだ3ヶ月であるため、継続して行うことによって出てきた問題については今のところ起きてはいない。

(委員) 昨年度の養成講座受講者 11 名のうち 7 名がプレーリーダーとなったとのことだが、残りの方はどうなったのか。

(団体) 1 人は仕事が転勤となり、遠くに引っ越した方である。また仕事の内容が変わったことにより、土日が出られなくなった方が 1 人いる。あとは、養成講座は個人のスキルのために受け、実際に

プレーリーダーとして活動していく気がなかったことが判明した人である。

(委員) 経験上、プレーリーダーの養成には5年くらいかかるのではないかと思う。広いところがあるにもかかわらず、地域の公園ではボールが跳ねてはいけない等、子どもが自由に遊べる場所が少なくなっている。できるだけプレーリーダーを養成していただきたいと思う。地域としてもできるだけの協力はしたいが、地域も手一杯である。

(団体) プレーパークには、プレーリーダーとボランティア以外にも、その日に来て、その日の様子を見ているという「世話人さん」という方々がいる。そういった方たちも、私たちにとってはとても大切な方である。それは、子どもたちを見ることによって、公園の在り方についての啓発活動をしていただいているという部分があるからだ。特に60代以上の方の中には、「昔は当たり前だったことがどうして今はできないのか」と聞いてくる方がいる。こういった意見については行政に対しても声をあげてほしいと思う。

(委員) 実際に子どもたちはどう集めているのか。たまたまいる子に声をかけているのか。あるいは事前に手紙などを出すのか。

(団体) プレーパークについては、その場に来た子たちが遊んでいく。おだいプレーパークについては月に2~3回くる子どもたちだ。毎回来る子は3人くらいいる。そういった子が友だちを連れてくるので、公園の中で呼び込みをしなくとも30人から50人、多い時には100名くらい来ている。「プレーパークがあるから遊びにおいで」というのは、プレーパークの在り方としては違うと思う。

(委員) 誰もがきていいということか。

(団体) 相違ない。名前だけは書いて遊んでもらっているが、書かない子も半数ぐらいいる。

(委員) 養成講座は、規模として最低何人から最高何人くらいまで可能なのか。

(団体) 新青樹としては、1人ずつでもやっているが、養成講座と銘打った時は、最低5名はほしい。講師を頼むにしても予算上採算が厳しくなる。個人で「どうしてもやりたいので、教えてほしい」と頼みに来る方もいるため、そういった方については1対1で6ヶ月くらいかかって行う。上限は設けなくとも5人いれば嬉しいと思

うくらいだ。前は、自分のスキルのためにという方もいたので、人数が多くなったのかもしれないが、10名以上になったからといって、お断りするということはない。

(委員) 募集はこれから行うと思うが、現段階で受講希望者はいるのか。

(団体) 昨年度、日程的に合わなかったため断念したが、今年は、いつから開講するのか聞かれる方はいる。ボランティアとしてプレーパークに関わっていたが、プレーリーダーとしてかかわってもいいと考えている人もいます。

2 審査結果

テーマ	団体名	得点 (点)	交付額 (円)
住民の手による〇〇ワークショップ等の開催	東浦アートプロジェクト	73.6	260,000
みんなが憩える公園づくり活動	特定非営利活動法人新青樹	81.6	170,000

3 講評、総括

委員5名より下記のとおり講評があった。

(委員) 自分たちの力で映画をつくり、東浦をPRすることは、東浦のためになると思う。

またプレーパークについては、元気な子どもを育てることに寄与するものであると思う。

ただ、そうした活動をする中においても、町が目的としたことも忘れずにいてほしい。

今までは、町が発起者としてワークショップを行っていたが、今回のパートナーシップ推進事業の町側の狙いは、地域みんなでワークショップを行い地域の課題をみつけ解決していく風土をつくることだ。また、公園については、地域の公園をみんなで使っていくムードをつくり、公園を良いものにしていくことが狙いである。

これらの狙いについては、頭の片隅において、事業をすすめてほしい。

(委員) コミュニティとしては、地域の安心安全のため、まちづくり実行委員会などで、地域課題の解決に向けた取組を行っており、手一杯なところがある。今回申し込みのあった事業は、我々が手を出したくても出せない事業である。ぜひ、しっかりと計画を練って、事業を実行して行ってほしい。

アートプロジェクトさんについては、ワークショップに多くの人を巻き込んでほしい。また、新青樹さんについては、東浦でプレーパークが維持できるだけの人材を育成してほしい。

(委員) 新青樹さんについては、今回の事業は、プレーリーダーの養成ということではあるが、公園を有効に使うことが(町がテーマとして出した)目的である。プレーリーダーさんが各地区の公園を有効につかってもらえるような話へと広がっていくとよいと思う。

また東浦アートプロジェクトさんについては、「映画の制作」が目的にならないよう、「ワークショップ」が目的になるよう心がけてほしい。焦って映画をつくる必要はなく、ワークショップにじっくり時間をかけて行ってもらえればよいと思う。

(委員) 東浦アートプロジェクトさんについては、「映画をつくる」といった想定を元々していなかったため、東浦の住民パワーというのもここまでできたのかと嬉しく思った。

映画づくりは、あくまでも一つの手法である。東浦町の住民活動をより盛んにしていただき、自分の住んでいる町が東浦で良かったと思えるような、誇りや郷土愛を抱けるようなワークショップを行ってほしい。

新青樹さんは、2年目ということで、この度のプレーリーダー以外にも、プレーパークの運営で大変お世話になっている。ありがとうございます。今は、子どもたちが遊びづらい状況にある。「近所に保育園や幼稚園があるとうるさいからつくってくれるな」というような風潮がある中で、公園についても子どもたちにとって、やや息がつまる場所があるのではないかと思います。このようなプレーリーダー養成という活動を通じて、もう少し子どもたちが遊びやすい公園になるよう、そういった雰囲気町内に醸成されるよう活動に取り組んでもらえるとよりよいのではないかと思います。

(委員) 新青樹さんについては、2年目ということで着実に事業をすすめてほしい。一方で、いずれ3年目4年目へと取組を進めてい

く上では、同じことを同じだけやっただけでは、十分ではないところが出てくると思う。反省や工夫を各年度で行い、取組を進化させていく姿勢を保ってほしい。

プレーリーダーは、子どもの命にも密接にかかわることになるので、お互いに覚悟をもって事業に取り組んでほしいと思う。

他方で、「世話人」とまではいかなくとも、少し応援する人、あるいはプレーリーダーほどの知識はないが少しは持っているサポーター的な人が少しずつまわりに増えていくとよいのではないかと思う。

色々な人たちとの色々な関わり方を探求しながら、2～3年のスパンで取組を行う際に、どのように行っていけばよいのかということを考えさせられた。逆に言えば、講座に8日間出席できなくとも、4日間くらいできれば、「プレ」プレーリーダーやサポーターくらいの位置づけから次のステップに進んでいく人がいてもよいのではないかと思った。

市民映画に関しては、発表にもあったように確かに色々な地域で市民映画の取組がされており、1つのメディアツールとして、大事になっていきていることは間違いないと思う。

ただ、「映画制作」を目的とするのではなく、映画制作を通じて「何を目指すのか」という意識付けがとても大事であると思う。例えばタカハマ物語については、結果的に市民映画をつくってはいるが、「子どもたちが活躍する場をどうつくるか」という目的のためにつくられたものである。これを加味すると、アートプロジェクトさんが取り組むべきなのは、「住民の手による〇〇ワークショップ等の開催」の中での市民映画制作にあたるものであり、そのあたりは大事にしてほしい。

言い換えれば、1年後の報告の中では、「市民映画に向けてこういうものができました」というだけではなく、「ワークショップを開催し、多くの人に参加して、当初想定しなかった豊かな話し合いがされ、それがシナリオや素材の中で活かしている」という点、「議論を通じて生まれたもの」について、話していただきたいと思う。プロセスの中で、いろいろな人たちが関わり、豊かな議論ができたということ「見える化」する等して、見せていただきたい。

行政主導型で行うのとは違う市民主体でおこなうワークショップの可能性について、行政だけではなく地域の人たちにも見せていけるような事業になっていくとよいと思う。